

## コバルト短編小説新人賞もつ一步

### 『マンガニーズブルー』

原稿用紙換算30枚

揺月凧 著

「君の空の色は素敵だね。僕の田舎で見た磐梯山の山の色に似ているよ。マンガニーズブルーのいい空だ」

その教師は縁のない眼鏡を少し押し上げながら、私の絵を見て言った。

「マンガニーズブルーって、初めて聞きましたけど」

「それは、もっとも濁りのない青のことさ」

参時間目の授業時間。私は、他に生徒がいない美術室の窓際で油絵を描いていた。傍で教師がそれを眺めている。

式月の厳寒のとき。吐く息は薄く白く染まる。遠慮して弱めにつけたストーブは、外の寒さに負けてあまり役に立っていない。

せわしなく動かす手だけがほんのりと熱を運び、キャンパスに筆を押しつけていた。

「だけど、上手く描けないんです。なんだか怖いんです。

描くのが」

言いたいことが纏まらないうちに、言葉が口から零れ落ちた。

『描くのが怖い』か。なかなか興味深いことを言うね。こんなこというとおべっかを使っているかと思われるかもしれないけど、僕もそう感じたときがあったよ」

円を描くように私の横へ回りこみながら、その教師は言った。教師の名は、今川といった。下の名前は知らない。一番初めの授業で聞いた記憶もかすかにあるのだけれど……。

その今川先生は教室の柱の傍に積み重ねてあった椅子から一つ選び持ち上げると、私の近くにおいた。そして、窓の外を眺めるために少し顎を持ち上げて、手を組んで座った。

私は手を休めて、一緒に外を眺めた。

空は青く、先生の言葉でいうならばマンガニーズブルーに透き通り、校庭の木々は無言のまま、葉を纏わない姿で

立ちつくしていた。枝には名前の知らない鳥が所々に羽を休めて泊まっている。

どこかのクラスの体育の授業は、バスケットボールだった。味方に指示をする声と応援の声が交じり合って二階のこの場所まで昇ってきている。

「そう感じたのはいつだったのですか」

私の問いに今川先生は口を一文字に閉じていたずらっばい目つきをして誤魔化した。

その表情には見覚えがあった。初めて美術室に一人で来た時と同じ表情だったからだ。

あれは、一月の半ば頃のことだった。

私は夏休みが終わってから、登校拒否をしていた。心配した担任の先生が、美術の先生と言うこともあり、美術室への登校を勧めてくれた。保健室登校というのはよく聞く言葉だけど、美術室登校というのはあまり聞かない。そういうふうな学校に行ってみてどうなるか判らなかつた。けれど、冬休みも開けた頃、私は他の生徒に見つからないように恐る恐る美術室の扉を開いた。嫌だったらまた行くのをやめてしまおう、という気持ちを胸に住まわせながら。

「こんにちは、阿部みのりさん。僕を困らせるようなことをしない限り、ここで何をしてもらってもかまわないんだけど……。もし、絵を描きたいのであれば教えてあげることもできるけど」

いたずらっばい表情を浮かべて先生は言った。美術の教師だから絵を描くことを教えて貰えるのは当然と思えるのだけれど、そのときの今川先生は自嘲ぎみにそういつたのだった。

他の先生がそんなことを言えば、登校拒否をしていた私に気を使って言葉を選んでいるのだと思つて、返つて心を閉ざしたかもしれない。けれど、今川先生はいつもの授業の時も遠慮がちなものいいだったから、その言葉は素直に受け取れた。

「先生の得意なことを教えてください」

「僕の大学時代の専攻は油絵だったから、まあ、それが一番得意なのかな。それでいいかい？」

三十くらいという年齢を感じさせない声で、だけど、とても落ちついた調子で先生は言った。

私は特に何も考えずそれを受け入れた。そのときは学校にくることが怖くて、それ以外のことを真剣に考える気力

がなかった。

その日から、今川先生の空きがある時間を見計らっては学校へ行き、油絵を習うことになった。

「デッサンがが終わったら、色付けをします。まずは、あなたの心の感じたままに描いてみてください。油絵は気に入らなければやり直すことができます。そのとき思う最善の色を積み重ねていけばきつといい絵が描けますよ」

言われるままに、地塗りされたキャンパスの上に描かれた線を辿って色をつけた。

美術室の中は何もかもが淡くて、ゆったりとした空間だった。

時折、不登校になる前に行っていた教室の情景が目には浮かぶ。それを思い出すたび食道の当たりに硬いものが詰まっているようないやな感覚に襲われた。あそこは、こことは正反対の場所だった。

肌を痛めつけるような化粧。決まりのような制服の着方。芸能関係のことに終始する話題。私は流行に流されたい訳でも、自分の殻に閉じこもりたいわけでもなかった。ただ、荒れ狂う波のような毎日の生活の中で、考えていることをスポイルしてしまいそんな無言の圧力を同級生から感じていた。それが嫌だった。雑誌やテレビにあることが全て。それ意外の細かい感情も目標もいらない。全てを焼き尽くしてしまう太陽のフレアのように同級生達は輝いていた。

何度、私も『それ以外』の感情を殺ぎ落としてしまおうかと思っただか。だけど、それは上手く行かなかったし、マイペースでやっていくにも臆病すぎた。駄目な私。

「どうしました。手が止まっていますよ」

今川先生の声にふと我に返る。キャンパスには覚えのない色がつけられていた。

「あ、すみません」

あわてて謝った私に先生は笑い声を漏らした。

「別に謝る必要はないのですよ」

今川先生はなぜ描く手が止まってしまったかを聞くことはなかった。両親も、家に尋ねてきた生活指導の先生も、私が学校に来ない理由を聞くことに躍起になっていたというのに。

今思えば、そのことがここに来る心を軽くしていた。だけど、まだ今川先生を信用したわけじゃなかった。その人の前では仲良くしておいて、陰で悪口を叩く友人を幾人も

見ていたからだ。先生も本当のところはわからない。そう思っていた。

だけど、事件は起こった。それは事件と呼ぶにはあまりにも小さな出来事だったのだけれど、私には大事件だった。いつものように美術室に向おうとしていた私の背後から呼びかける声があった。すぐにそれが絵美と初音だとわかった。登校拒否をする前は同じグループで仲良くしていたからだ。

仲良くといっても、表面上はという但し書きが必要かもしれない。嫌いでもなかったけど、特別気を許せるほど好きでもなかった。

なんで、ここにいるの？ 会ったら気まずいからと、授業がはじまってから来たのに。そう思っていると、絵美と初音は、たまたみかけるように話しかけてきた。

「みのりー。どーしたのー？ 学校来たんだー。みんな心配してるよー」

「そーそー。悩みあるんなら聞くからさー。学校きなよ。私だつてこう見えても結構悩んでんだから」

心配してくれてるんだ。と思つたのもつかの間、嫌な感情が込み上げてきた。いつもと変わらない軽めの声の調子が不安にさせた。ひねくれているのかもしれない。だけど、にこやかに宗教の勧誘をされているような気になっていた。

「今、授業じゃないの？」

話しを終わらせたくて必至に言葉を搜す。

それを聞いて携帯でメールを打っていた初音が、顔を上げて言った。

「今、自習でさー、私たち抜け出してきたちゃってただけど。メールしたら琴実と慶子も来るって言うから話さない？」

足が力を失いそうになる。自分が見世物になってしまったよつで惨めな気持ちがある。

早くここから逃げ出してしまいたい。

「ご、ごめん。美術室に用があるから」

そう言ったのに、絵美が後ずさりした私の腕に自分の腕を絡ませてきた。

「いいじゃん、久しぶりだし。それともあれ？ うちの担任の今川先生とできてるって噂ほんとなの？」

気持ち悪くて手で口を塞いだ。美術室にきていることみんな知っていたんだ！ この事はあんまり知れ渡っていないだろうとたかを括っていた自分が情けなくなつた。

「だけど、それ以上に『今川先生とできてる』といわれたことに腹が立った。できてるっていう下世話な言い方が、先生とののんびりとした時間に泥を塗られたようで、最悪な気持ちになる。」

「そんなことないっ」

絵美のつけている香水の香りが鼻について、ますます胃がむかついてくる。絵美の涼やかな目元が好奇心で熱を帯びていた。そう言えば、恋愛話に目がなかつたっけ。そう思えた自分の意外な冷静さにびっくりした。それでも、冷静さを留めていたものが、次の言葉でいっきに砕けた。

「ねえ、教えてよ。私達、友達でしょ」

友達！ その言葉に宿る悪魔の力が、心臓めがけて飛んでくる！ 友達だから、服装が似ていて当たり前。メールを毎日くれて当たり前。同じテレビ見ている当たり前。以前はそんな『友達』をするためにがんばっていたけど、今は、苦痛でしかないと知ってしまったている。

それを知らないふりをしているのか、気づいてない絵美との間に大きな亀裂があるのを感じた。私、おかしいのかもしれない。他の子達はそれで大丈夫なんだ。どうして他の子みたいに感じられないんだろう。上手くやっっていけないんだろう。

象の群れの中に混じった蟻になってしまったような気がした。それは身体がいたくなるほど寂しいことだった。

どうやって手をほどこいたのか判らなかつたけれど、いつのまにか美術室へ向う階段を上っていた。支えるものがないようになってしまった案山子のように、頼りなくふらふらと足を持ち上げる。

今川先生、今川先生。

知らないうちに先生の名前を唱えていた。

踊り場のところにある窓から中途半端に曇った空が見える。晴れていれば、気分も変わるのに、こんな天気じゃ元気になれない。

そんなことを考えながら、美術室に入ってしまった。

今川先生は、絵を描いていた。外国の田舎を思わせる景色の絵だった。それは、暖かくて切ない。それを見た途端、思わず涙が溢れてきた。

こんなところで泣いたらいけない。そう思ったのに涙は後から後から落ちてきて止めようとしても止まらなかつた。「どうしたんですか？ 阿部さん」

先生は背後の異変に気付いて駆け寄ってきた。先生の慰

めの言葉は、やさしすぎて逆効果だった。言葉が発せられるたび辛い気持ちを押さえていた防波堤が崩れていき、涙が溢れ出した。

「駄目なんです、私。どうしても他の人と同じようになれなかった。ヒット曲も好きになれなかったし、他の子と似たようなかっこをするのも嫌だった。だけど、友達がいなくなるのが怖くてどうしようもなく怖くて」

心に思いつくままに話をした。きつと先生困っている。何を言っているのか、自分でも良くわからない。

頭の中がぐちゃぐちゃになってくる。私は知らないうちに声を上げて泣きはじめていた。

「モネという画家を知っていますか」

泣きじゃくる私の手首を掴んでやさしく先生は言った。

いくら宥めても、手のつけられない私に対する対処の方法を変えてみたようだ。

「聞いたことはありません」

今川先生の気遣いを無駄にはいけないという気持ちが働いて、私は素直に答えた。

「有名なところでは『睡蓮』を書いた画家です。彼は風景画が得意でした」

「……」

話の意図がわからずに、俯いたまま話を聞きつづけた。

「初め、彼の絵はただの印象にすぎないと批判されました。風景をただ写し取ったにすぎないと。だけど彼は後に絶賛を浴びるようになりました」

「それとこれと何か関係があるんですか」

いつまでたっても一向に結論に達しないので、少しもどかしくなって語気を荒げた。

「人は同じものを見ても同じように感じるとは限りません。そういう意味でモネはただの風景を鋭く感じ取るのに長けていました。あなたが、日常で違和感を感じることを恥じる必要はないのです。人はそれぞれ違うのですから、私達はロボットではないっ」

先生も感情が高ぶって上ずった声を出す。

いつもの先生とは違っていて、それが酷く衝撃的に感じた。かすかに感じる男の人の匂いがさつきとは別の意味で胸を締め上げた。

先生は、心を静めるためか大きくため息をついた。そして、自分の絵の前に座った。

「まったく、あなたを見ていると絵が描きたくなってしま

う」

「それどういう意味です？ 絵の世界に現実逃避したくなるってことですか？」

その言葉に悲しい気持ちも忘れて、元気良く先生に詰め寄った。

「おや、もう元気になったのかい？ 君は忙しい人だなあ」

先生は、目尻を下げて腰を丸め、くすくすと笑った。

「そんなこと言っていないで教えてください。どういう意味ですか？」

「僕を困らせるようなことをしたから、教えてあげません」  
人をおちよくるような感じで先生は言った。

「ずるいですよ！」

そう言っではみたものの、心の中は楽しくてしょうがなかった。子供のようなことをいう先生がなんだかわいく見えてしまったからだ。

堪えきれず笑ってしまった。そのときは、嫌なことを何もかも忘れて笑っていた。

先生なら、信用しても大丈夫かもしれない。ようやくそう思えたのはそのときからだった。

それから美術室へ通うのは楽しくてしょうがなかった。友達と会わないようにいつそう注意深くしていたけれど…

…

あの日、先生が描いていた絵は大学の頃描き掛けにしていたものらしい。教職についてから、長らく真面目に絵を描いたことがなかったけど、久しぶりに描きたくなっただとわかっていた。

「あなたが少し羨ましいです」

形になってきたキャンパスの絵を見ながら先生は言った。

「何言ってるんですか、先生に羨ましがられることなんてないですよ」

冗談かと思っただけであしらった。だけど、先生は物悲しげな表情で私を見ていた。

先生？

なんともいえない不思議な空気が教室中に満ちた。

「何が羨ましいんですか？」

私は慌てて先生の言葉に対して、真面目に返した。

「思いつきり泣いたり笑ったり出来ることです」

「そんなこと羨ましがらないで下さい。だいたい、先生だって良く笑うじゃないですか」

先生の言っていることはそういうことじゃないんだろう

なとちよつと思つた。

「僕はもう駄目です。年ですから。笑つたり泣いたりする前に、余計なことを考えてしまふ」

「まだ三十歳でしょ。なにいつてるんですか！」

年より臭いばやきに、私はなにも考えず笑つていい返した。それを見て先生は凍つた湖面に反射する光のように、静かに力強く微笑んだ。

時は手のひらで溶けてしまふ雪のように過ぎ、いつのまにか修了式の日を向えていた。油絵を習い始めて二月の間が流れていた。

修了式なんて、今の私には関係のないことだった。それでも、春休み中はここに絵を描きに来ることもなくなると思つと寂しくて、今日も変わらず美術室に向つた。

式が終わつたすぐ後だつたらしい。校門から帰つていく生徒たちが押し寄せて来ていた。

ガチャ

美術室の扉のノブは、右にほんの少しだけ回つて止まつた。鍵、閉まつてるんだ。修了式だから授業もないし当然かもしれない。

先生はどこにいるんだろう？ そう思つて、とりあえず職員室に向つた。もし、居なければ鍵だけでも貰えないだろうか。そんな考えをめぐらせながら本館に向つた。

「あつ、菱沼先生。あの、今川先生、職員室に居ますか？」

向かう途中、偶然行き交つたE組の担任に尋ねた。菱沼先生は私に軽く目をよこすと私が誰であるか少し考えるような素振りを見せた。そして、すぐに目を軽く細め、口を軽く開いたので、私が誰であるか理解したようだった。だけど、その表情はすぐさま困惑の顔に戻つていた。

「そうね。修了式に出てないから知らないのも当然だわ。でも、てつきり聞いているかと思つたのに」

「なんの事です？」

虚をつかれてぽうつとしている私に、菱沼先生はこう言つた。

「今川先生は、この学校をやめられたわ。なんでも、」

全身に電撃のような悪寒が走つた。私は菱沼先生の話が終わるのもまたず、職員室の方へ駆け出していた。

嘘。そんなことあるわけない！

職員室から鍵を取ると、急いで美術室に引き返した。美術室に行けば、いつものようにのんびりとした佇まいで先生がいるような気がしてならない。

それでも、菱沼先生が嘘を言っ得ることは何もない。事実が、歩を進めることに胸に差し迫ってきた。

先生は行ってしまったんだ！ 私に何も言わず行ってしまったんだ！

必至で美術室までの廊下を走った。床はうねりを上げて歪み、足は纏れてよろけてしまう。それでも、どうにか淡い緑色をした美術室のドアについている銀の取っ手に手を掛けることができた。

今川先生！

ドアを開けたその先に見えたのは、等間隔にそろえられた机と椅子。回りを取り囲むようにいろいろな美術の道具が積み重ねられている。例えば石膏像や使い古された絵の具のチューブ、そして、流しのところに立てかけられたパレット。いつもと変わらない美術室の情景だった。

ただ黒板の傍に置かれた美術道具一式と先生の姿だけが残らなかった。

そのことが身体中を駆け巡り、血管の中を縦横無尽に動き初めたような感覚に襲われた。

ああ、心臓が爆発して身体が粉々に砕け散ってしまう。そう思われて、両腕を身体に巻きつけ必至で繋ぎとめてみた。涙を流すにはあまりに衝撃的過ぎて、槌で打たれているような感じの頭をもたげたままキャンパスの前に座りこんだ。

窓から夕日の光がどこかに反射して交差しながら射しこみ、私の目をつぶらせた。

眼裏に先生の姿がぼやけて浮かんだ。

今川先生のこと……。そのことを認めるのは怖かった。決して解かれることのない呪縛にがんじがらめにされてしまいそうな恐怖。

だけど、認める。認めなければ先に勧めない気がするから。

私、今川先生のことが好きだ。どうしようもないくらい好きだ。

耳に響く嗚咽が自分のものだと思いつくには、時間がかった。いつのまにか涙が溢れ頬を濡らしていた。口中に塩辛い味が広がる。

どうして何も言わず行ってしまったの？

頭にこびりついて離れない疑問が後頭部で疼く。キャンパスの前に置かれた椅子に身体を持ち上げて座る。そのまま、しばらく白い世界で漂った。

今川先生は最初からいなかっただ。このキャンパスさえなければそう思ってしまった気がするのに。それは、いつもと変わらずそこに置かれている。この絵が唯一、私と先生の時間の証人なんだ。そう思っ、上に掛けられた布を持ち上げて中の絵を見ようとした。

これは……。

キャンパスを支えるために横に伸びた支え木に封筒が一つ挟まっていた。

手が無意識でそれを掴み取り、封を開けた。

中には、便箋が一枚ほど入っていた。紙にはきっちりとした草書体で、こう書かれていた。

「拝啓

阿部さん。お元気ですか。ここに来ていたということは多分元気であると思います。

早速ですがお詫びを言わなければなりません。実は、僕は独逸に留学します。以前から誘われていたことなのですが、ようやく決心がつかしました。

残念なのはあなたに直接云わないうちに出発してしまうという事です。

毎日美術室に顔を出してくれているあなたには申し訳ないのですが、これからは油絵を教えることができなくなってしまうました。本当に申し訳のないことです。

直接あなたに言えなかつたのには訳があります。

以前あなたは私にこう言いましたね。

「描くのが怖い」と。その言葉は僕の心を揺さぶりました。

僕がそれを感じたのはいつのことかという問いを前は誤魔化してしまいました。それは大学の頃です。いくら描いても誰かの真似をしている気がして、そのくせちつとも評価されなくて苦しんでいるときその気持ちを抱きました。

僕には、あなた自身の苦しみがその言葉に込められている気がしてなりません。自分に自信が持てなくて怯えているあなたがその言葉を発しさせたのだと。

それは、漫然と教師という地位に甘んじている僕への警告でもあつたように感じられます。

あなたを見てみると、その感情の鋭さがうらやましくなります。そして、僕にもそういう気持ちがあつた頃があつただと思ひ出されます。

今は、辛いでしょう。でも、そういう気持ちを抱けなくなつたとき、人は人として価値を失っていくのだと思ひました。

説教じみでいて、回りくどいことをいってすいません。僕は、その一言で留学を決心したのと同時に、あなたに強くひかれてしまったのです。

だけれども、あなたを選んでこのままここへ居座ってれば、いつかあなたに置いて行かれるような気がしてなりません。僕の一方的な想いですが、あなたに見合うためには留学をするべきだという結論に達したのです。

だけど、このことを面と向ってという勇気が僕にはありませんでした。情けないことです。

阿部さんは、このことは忘れて下さい。これからもあなたはあなたの絵をかいていってください。それだけが僕の願いです。

敬具」

先生！

空気に漂っていた温もりの欠片達が一斉に身体の中心めがけて集まり出した。今までシヨックのせいにくすんでいた回りの風景が、まばゆいばかりの色彩を伴って押し寄せる。

先生！

そのときは想いを通じて嬉しいとか、そんな即物的なこととは考えられなかった。ただただ幸福で身体中が満たされている感覚を押しさえきれず、震える身体を保っていることで精一杯だった。

私も、今川先生に見合うような大人になりたい。

考えられたのはそのことだけだった。頭が故障した機械になってしまったかのように、それが繰り返し繰り返し頭の中で響いては消えた。

いままで、どうやって生きていけばいいのか判らなかつた。何をやるのも自信がもてなかつた。でも今は違う。自信を持っていえる。先生に負けないくらい、いい大人になりたい。そのためにはここに立ち止まってちゃ駄目なんだって。

キーン

窓の外の遙か高いところから飛行機が飛ぶ音が、人の話し声突き破って耳に入ってきた。

咄嗟に、窓の枠に手を掛け空を仰ぐ。飛行機は銀の腹を光らせて、夕焼け色の西の空に飛んでいった。

それに先生が乗っているわけはないのは判っていた。だ  
けど、それに向かって大きく手を伸ばす。  
先生。約束するわ！ 私も先生に負けなくらい、いい  
大人になるって。  
その伸ばした手は、赤く透き通った大気の中に溶けて  
いった。

---

『マンガ二丁スブルー』 揺月風 著

[sakka.org](http://sakka.org)